

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12265

研究課題名（和文）シャーマン・リーの基礎研究：アメリカのアジア美術受容史における位置づけ

研究課題名（英文）A Study of Sherman Lee: Collecting Asian Art in America

研究代表者

五十嵐 潤美（Igarashi, Masumi）

岡山大学・教育推進機構・講師

研究者番号：90711622

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカの東洋美術専門家シャーマン・リーを研究対象とし、彼が前世代の東洋美術史研究者たちと一線を画す東洋美術観を形成するに至った背景を探った。その契機として、デトロイト美術館勤務と第二次大戦後の日本でのGHQ美術記念物課勤務を挙げることができた。中でもGHQ資料は網羅的に調査し、その勤務の実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リー研究の中で、あまり注目されていない初期のキャリアについて調査することにより、彼のアジア観形成の一つの契機を見出すことができた。また、GHQでの活動は、しばしばヨーロッパのカウンターパートであるThe Monuments, Fine Arts and Archives Programと比較されてきたが、その業務内容はかなり異なるものであることがわかった。その活動は作品の保護や日本美術の民主化を進めるものであり、今後、戦後美術政策を研究する上で、一つの手がかりとなり得ると考える。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Sherman Lee, an American specialist in Asian art, and explored the background that led him to form a unique perspective on Asian art, which set him apart from the previous generation of Asian art historians. I was able to examine two important turning points for this change: Career as an Asian art curator at the Detroit Institute of Arts and as an officer at GHQ, Arts and Monuments Division in Occupied Japan. Especially, I explored the records of GHQ and found the details of the work and his contribution to Japanese art administration.

研究分野：美術史

キーワード：シャーマン・リー GHQ/SCAP 占領軍 GHQ美術政策

1. 研究開始当初の背景

(1) シャーマン・リーは、アジア、特に日本・中国美術を専門とするアメリカの美術館キュレーターだった。デトロイト、シアトル、クリーヴランド、チャペルヒルなどアメリカ各地の美術館で、アジア美術コレクションの形成に関わった。特に、長年館長を務めたクリーヴランド美術館では、アジア各国の美術を体系的に収集し、世界有数の優れたアジア美術コレクションを作っている。また、ロックフェラーなど個人コレクターのアドバイザーとしてアジア美術収集を援助したり、アメリカ人のアジア美術理解を広める多くの展覧会を企画したりもしている。では、リーのアジア美術収集は、歴史的に見た場合、どのように位置づけられるのだろうか。この問いが本研究の出発点であった。

(2) アメリカでの本格的なアジア美術収集が始まった 20 世紀初頭に、重要な役割を果たしたのは、ボストン美術館だった。ボストン美術館は、岡倉覚三やアーナンダ・クーマラスワミーらアジア出身の知識人の力を借りて、収集活動を行っている。その後、彼らに学んだラングドン・ウォーナー、ジェームズ・プラマー、ハワード・ホリスらのアメリカ人が、各地の美術館や個人収集家のもとでアジア美術収集に従事していった。リーも学生時代からこれらの人脈と強くつながり、アジア美術とキュレーターの仕事を学んだ。ところが、第二次世界大戦後、リーは彼らのアジア観から距離を置くようになっていく。クーマラスワミーを神秘主義者と批判したことに加え、彼らとはかなり違う美術収集の傾向を示した。クーマラスワミーはアジア主要国（中国、日本、インド）の名品を狙って集めた。名品を紹介することで、アジアの高い精神性をアメリカの観客に示そうとしたのである。それに対し、リーはアジアの他の国々の美術品にも手を広げ、その国の歴史に沿って各時代の作品を系統的に集めていった。その結果、リーは中国・日本美術に加え、チベットや南アジア、西アジア、東南アジアの美術品にも広く手を伸ばしている。クーマラスワミーとリーの収集は、傾向が大きく違うのである。

(3) ここに、アメリカのアジア美術観における重要な世代交代が起こったのではないだろうか。一体なぜこのような変化が起きたのか。これが本研究の前提となる問であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、リーのアジア美術観の変遷を辿り、その思想的転換点を明らかにしつつ、彼の活動をアメリカのアジア美術受容史の中に位置づけることである。先に見たように、第二次世界大戦を境に、リーはボストン美術館流のアジア観から距離をおくようになった。この背景にはリーの思想的転換があったと考えられる。ではその転換とはどのように起きたのか。特に下記の二つの可能性を追求することを具体的な目的とした。

文化人類学者でアメリカ自然史博物館キュレーターだったマーガレット・ミードとのアジア展示をめぐる論争（対話）「アジアという他者をどうとらえるか」という問いをめぐる論争の詳細を明らかにする。

戦後、占領軍の一員として日本に滞在していた時の、リーの業務の詳細を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) これらの出来事とリーの変化を具体的に明らかにするには、第一次史料を発掘しつつ分析していく以外に方法はない。アメリカでリーの資料を保管する複数のアーカイブ（デトロイト美術館、スミソニアン研究所・アメリカ美術アーカイブ、クリーヴランド美術館、アメリカ自然史博物館、アメリカ議会図書館、シアトル美術館、ワシントン大学など）で資料を収集するほか、日本の国立国会図書館やメリーランド大学図書館にある GHQ の資料の中で、リーに関するものを収集することを第一の方法とした。

4. 研究成果

(1) デトロイト美術館においてマーガレット・ミードと関わった展覧会があったことが明らかとなった。

当該展覧会は 1944 年 2 月 13 日～3 月 5 日「The People of Bali」（於デトロイト美術館）で、インドネシア、バリ島の人々の日常を撮った写真のほか、工芸品、彫像、素描、絵画などを展示したものだ。2 月 18 日に担当キュレーターだったリーが会場に来客に向けてトーク、ディスカッションを開催している。

この展覧会はニューヨークの the Museum of Modern Art (以下 MoMA) が企画したのもので、当時 MoMA はこのような展覧会を企画し、地方の美術館に巡回展パッケージとして販売する事業を始めたばかりであった。MoMA が展覧会の元としたのはグレゴリー・ベイトソンとマーガレット・ミードによる 1937 年バリ島での文化人類学調査であった。展覧会は二人が撮影した写真と収集した資料で構成されていた。出品された写真の記録を見ると、1942 年に刊行され

た二人の共著による *Balinese Character: A Photographic Analysis* に掲載された写真と一致している。

1944年は第二次大戦中であったため、展覧会をめぐる記事には、「このような平和を愛するバリ島の人々が日本の侵略者によって脅かされている」とし、ナチスドイツによるロシア芸術の破壊と比して語っているものもあった。

(2) マーガレット・ミードとの書簡論争の資料はデトロイト美術館に保管されていないことが明らかとなった。

この展覧会に際し、リーは展示品の所有者であるマーガレット・ミードと、アジアの文化に関して書簡による論争をしたと後に語っている。しかし、デトロイト美術館のアーカイブを調査した結果、1943年および1944年のリーの部署の記録資料が行方不明となっていることが判明した。リーは通常、受け取った書簡はもちろん、出した書簡のコピーも全て保管しているにも関わらず、その時期の書簡類がいっさい見当たらないことから、何らかの事情で記録がファイルごと消失・紛失したものと思われる。この点は残念であったが、書簡を入手するにはマーガレット・ミード側のアーカイブを探さなければならないことがはっきりした点は収穫であった。しかしながら、この時点で COVID-19 の世界的な蔓延により、海外調査が不可能となり、書簡探しは諦めざるを得ないという結果になった。再度の機会が得られることを切望する。

(3) GHQ 勤務時代の業務の概要が明らかとなった。

国立国会図書館が所蔵する GHQ 資料のマイクロフィッシュのうち、リーに関する部分を収集、複製して、電子化した。リーが勤務した Arts and Monuments Divisions の活動の指針となったのは、1945年11月12日に GHQ が日本帝国政府に対して発行したメモランダムであった。“Policies and Procedures Relating to the Protection of Arts, Monuments, and Cultural and Religious Sites and Installations” と題されたこのメモランダムには、GHQ がどのような方針で日本の文化財政策を行うか、そして日本政府は何をしなければならぬかが細かく記されている。美術記念物課の内部文書を見ると、リーは厳格にこの指針にそって活動していたことが分かる。まず GHQ は日本政府に対し、国内にある全ての文化資源を都道府県別に英語目録にして提出するよう命じている。GHQ 文書の中に残されている膨大なその目録には、戦争によるダメージや占領軍による破壊があったのかどうか、保護や修復が必要かどうかなどの情報が記載されている。リーはこの資料を基に、重要と判断したものを調査するため現地に赴いている。頻りに日本各地を訪れていることが、残された数多くの出張手続き書類からわかる。これらの資料から、出張先の地域と特定の用務をつなぎ合わせることが可能となるので、GHQ の日本での活動の実態をより一層明らかにするための今後の基礎資料となるであろう。

また、ナチスに奪われた作品の回収や戦火からの作品保護が主な任務であったヨーロッパの the Monuments, Fine Arts and Archives Program と比較すると、その業務内容には大きな違いがあることが分かった。これは日本では戦後に活動を始めたことなどが要因であると考えられる。しかし、朝鮮に出張したり、日本国内にある中国朝鮮の美術品調査のため地方に赴いたり、といった記録も残されている。これらの国々からの美術品返還要求にも対応していたことが分かるが、実際に返還に関わった記録は見当たらなかった。

最後に、GHQ の活動の大きな目標として、日本美術界の民主化が挙げられる。そのため、リーは日本の収集家、美術史研究者と頻りに交流している記録がある。これらの活動が戦後の日本の美術政策に影響していると考えられる。

これら GHQ の記録に関しては、2回の学会発表を行ったが、今後、論文等の形で発表する必要があると考えている。

(4) 勝田蕉琴の活動について、予定外の成果があった。

リーのクーマラスワミー批判について調べているうち、クーマラスワミーとともに活動していたインドのタゴール家の資料から、日本画家勝田蕉琴について偶然にいくつかの新知見を得た。カルカッタ国立美術学校で教鞭をとるに至った経緯が明らかになるとともに、最近インドで滞印期の作品が発見されたことなどが分かった。今のところリーとの直接のつながりは不明であるが、今後の方向性を模索するため、これらの新知見を論文として発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 五十嵐 潤美	4. 巻 1
2. 論文標題 勝田蕉琴《ラーマの離別》について –インドで発見された失われた日本画–	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岡山大学教育推進機構教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 10~26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/66852	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 五十嵐潤美
2. 発表標題 占領下日本の美術政策とシャーマン・リー：GHQ美術記念物課の仕事から
3. 学会等名 日本国際教養学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masumi Igarashi
2. 発表標題 Katsuta Shokin: A Japanese Painter at the Government School of Art, Calcutta 1906-1907
3. 学会等名 India and Japan: Unearthing Lesser-known Linkages（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐潤美
2. 発表標題 シャーマン・リーと占領下の日本美術：GHQ美術記念物課の仕事から2
3. 学会等名 日本国際教養学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本国際教養学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成美堂	5. 総ページ数 95
3. 書名 大学生のための国際教養	

1. 著者名 Narsimhan, Sushila (editor)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 MOSAI	5. 総ページ数 337
3. 書名 India-Japan Narratives: Lesser Known Historical and Cultural Interactions	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------